

博物館だより

No. 7

企画展 「尾張の戦国武将—^{かねまつまさよし}兼松正吉—」

平成元年12月23日(土)～平成2年1月28日(日)



関ヶ原合戦図絵巻 岐阜城の攻防 (名古屋市博物館蔵)

織田・豊臣政権と尾張在地武士

尾張地方は肥沃な濃尾平野の中心を占め、昔から農業生産力の高い地域でした。この地方からは、農村に基盤を持つ武士(土豪層)が多く生まれ、戦国時代、彼らは城や館を構え、それぞれに勢力拡大の動きを示していましたが、信長・秀吉によって全国統一が進められる過程で、次第に織田・豊臣氏の家臣団として組織されていきました。彼らの中には大名となり出身地を離れた者、尾張に留まりのちに尾張藩士となった者、あるいは戦いの中で滅びていった者など、様々な生き方がみられますが、信長・秀吉の統一政権を支えていたのは、ひとつには彼ら家臣団の力であったといっても過言ではありません。

信長の家臣の中からは、豊臣秀吉をはじめ、前田利家、柴田勝家、丹羽長秀、佐々成政、佐久間信盛、池田輝政などがのちに大名に取り立てられ、秀吉の家臣からは、蜂須賀正勝、長束正家、増田長盛、福島正則、堀尾吉晴、浅野長政、加藤清正らが大名となっています。

一方、家臣団に属しながらも、大名に取り立てられるまでには至らず、常に尾張にあって、この地を支配する領主とつぎつぎに主従関係を結んでいた、いわゆる尾張衆と呼ばれる者たちには、兼松氏、生駒氏、坂井氏、横井氏などが知られています。尾張の領主は、死や除封により頻繁に交替

しましたが、彼らは最後まで主君と行動を共にするということはありませんでした。彼らは、国侍として尾張の地に強く結び付き、尾張の在地領主としての側面を持ち続けながら、この地に入ってくる新たな支配者に仕え続けていたのです。また、彼らの中には、村に土着し武士の身分を離れた者も少なくありませんでした。

彼ら在地武士たちはどのようにして激動の時勢へ対応していったのでしょうか。本企画展「尾張の戦国武将—兼松正吉—」は、葉栗郡島村(現一宮市)出身の兼松正吉に焦点を当て、現在名古屋市豊清二公顕彰館に架蔵されています兼松家文書を中心に、武具・合戦図絵巻など、兼松家に関連する資料を展覧し、当地方の戦国から江戸時代への移り変わりをたどろうとするものです。

●講演会

と き：平成2年1月7日(日)午後1時30分から
テーマ：「ある在地武士の生涯」

—兼松文書について—

講師：名古屋大学教授 三鬼清一郎氏

●映画会及び展示説明

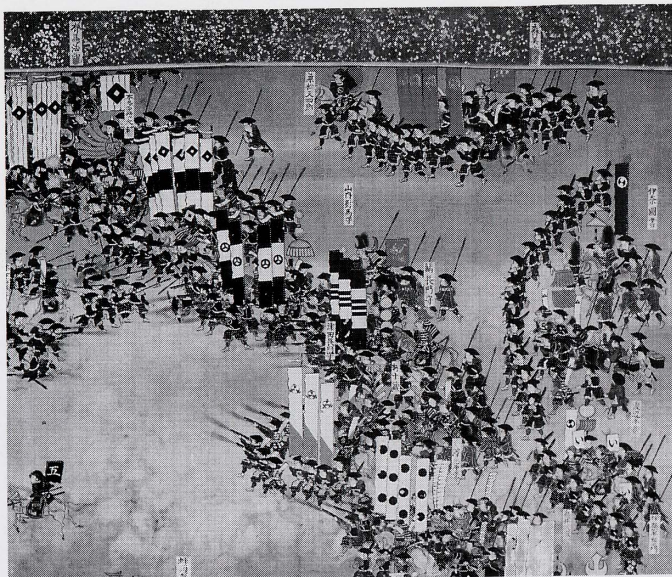
と き：平成2年1月21日(日)

午前10時30分・午後2時の2回

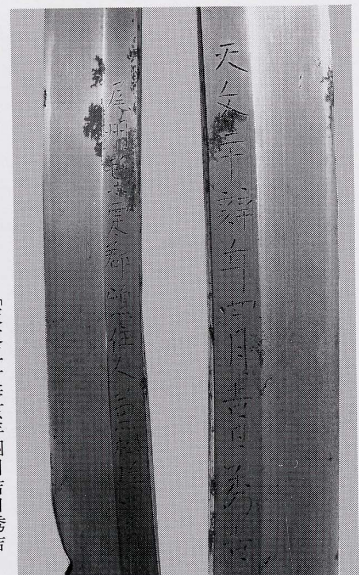
上映映画：「鉄砲の伝来」

「安土桃山時代の社会と文化」

展示説明 当館学芸員



関ヶ原合戦図絵巻 (岐阜市歴史博物館蔵)



兼松秀吉熱田社奉納刀 (熱田神宮蔵)

兼松又四郎正吉の生涯

兼松氏はもと越前国北庄兼松村の出身と伝えられ、尾張国葉栗郡島村に移住し、備前守正盛、正利、正徳、秀清と続き、兼松家中興の祖ともいえる正吉に受け継がれたものである。正吉は天文11年(1542)に生まれ、はじめ又四郎と称し、修理亮と号した。信長に仕え、永禄3年(1560)桶狭間の戦いを初陣とし、同9年(1566)信長から兼松弥四郎秀吉ひつしよ(没収)地を与えられ、家臣団に編入されている。弥四郎秀吉は、天文20年(1551)熱田社に刀を奉納しており、その銘から正吉らと同じ地域に本拠をおく一族とみられている。このころ信長は美濃の斎藤氏と戦っており、兼松一族にもその去就をめぐってかなりの動揺と分裂があったことがうかがわれる。信長からは、翌年美濃進出直後河野(江南市)に10貫文を与えられたのをはじめ、美濃に200貫文、さらに天正4年(1576)には近江国内に35石を与えられている。

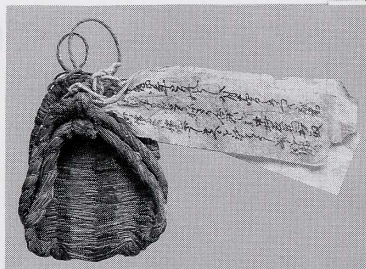
正吉は数々の合戦で軍功をあげたが、元亀4年(1573)朝倉勢を越前近江境の刀根山に攻めた時、武者頭を持参した正吉が裸足であるのを見て、信長が自らの腰に付けていた足半あしな(短鞋)を与えた話はよく知られている(この足半は肖像画にも見える)。

天正10年(1582)本能寺の変は正吉にとって大きな転機であった。信長没後は信雄のぶかつに仕え、従来のぶかつの所領を安堵されたうえ3カ所の加増を受けている。「織田信雄分限帳」には鳴両(田)郷360貫を領すとあり、「系図」ではこれを800石とする。同12年(1584)小牧・長久手の戦いでは信雄・家康方に属し、羽柴秀吉と戦っている。

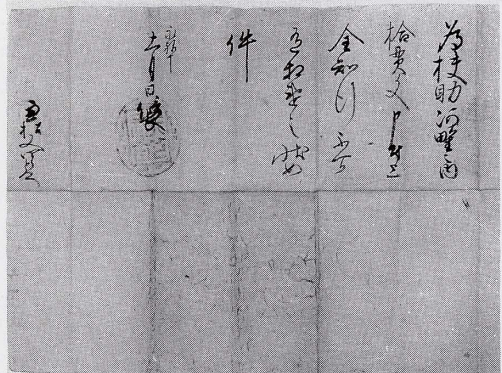
信雄が除封された後は秀吉に仕え、天正19年(1591)美濃に510石を、文禄2年(1593)に秀次から尾張・近江に510石をそれぞれ与えられ、兩人から知行を受けている。秀次切腹直後の同4年(1595)には、秀吉から丹羽郡内に1000石を与えられ、文禄の役には朝鮮に渡り、その軍功により黄幌衆に選ばれた。

秀吉没後は家康に仕え、慶長5年(1600)会津攻めに従軍したが、折り返し岐阜城攻めには家康の命により目付役として一柳直盛の軍に加わり、木曾川越の戦いで首級四つを取ったという。関ヶ原戦の後家康の命により清洲城主松平忠吉に付せられ2600石を給された。

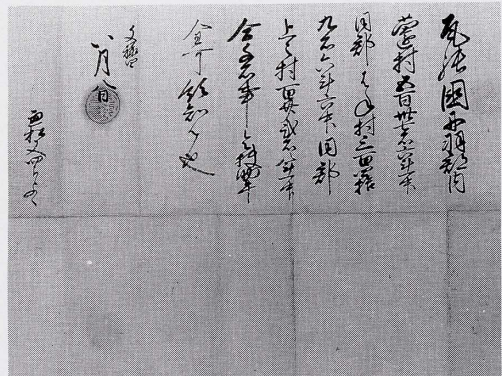
忠吉夭折後、尾張藩始祖義直に仕え尾張藩士となり、大坂の両陣にも参戦した。元和2年(1616)家督を次男正成に譲り、寛永4年(1627)9月5日86歳で戦乱に暮れた生涯を終えた。法名一当英公居士。(毛受英彦)



足半 (名古屋市豊清二公顕彰館蔵)



織田信長朱印状 永禄10年 (名古屋市豊清二公顕彰館蔵)



豊臣秀吉朱印状 文禄4年 (名古屋市豊清二公顕彰館蔵)



兼松正吉画像 (若栗神社蔵)

資料紹介



常滑 大甕

15世紀後半(写真上)

一宮市大字馬見塚707 丹羽 義和氏寄贈

常滑 甕

16世紀後半(写真下)

一宮市萩原町中島2469 魚住 数一氏寄贈

写真左上は口径37.4cm、胴径59.0cm、底径16.9cm、高さ56.8cmの大型の甕。戦後家屋改修の時、前田氏宅の庭で壁土採取の際に出土した。倒立した状態で埋没し、中には何も入っていなかったという。

5段で整形され、口縁部は縁帯が幅広く頸部に密着し、肩部が張り出して最大幅となる。外面はナデ調整、内面は肩部に整形の際の指圧痕が認められる。自然釉の垂下の痕跡は見られず、肩の部分に窯印と考えられる記号状のへら刻文がある。口縁部の形状、胴部の張り具合など、15世紀後半の特徴を示す資料である。

写真左下は口径20.4cm、胴径43.5cm、底径16.0cm、高さ53.5cmの甕で魚住家の伝世品という。

5段で整形され、口縁部は外側に屈曲している。また器面全体に「テリ」と呼ばれる光沢を持ち、下胴部に環状の焼台の痕跡が見られ、一部融着残存している。これらは、16世紀後半に常滑窯に導入された半地下式の大窯の製品の特徴である。常滑市近郊の窯で焼成されたものであろう。

ともに中世から近世にかけての常滑窯の製品の形態あるいは流通を知ることのできる資料である。(土本典生)



森春濤書 聞鵬

紙本軸装 136.0×33.0cm

一宮市大宮3-5-19 後藤 利光氏寄贈

『森春濤詩抄』(昭和55年刊)を著わすなど、春濤研究の第一人者である後藤利光氏より、昨年9月に開催した「森春濤とゆかりの詩人展」を機会に、このほど春濤の書作品を中心に多くの資料をご寄贈いただきました。ここにその一部を紹介する。

一宮出身の森春濤(1819-1889)は幕末から明治にかけて漢詩壇を代表する詩人である。その創作活動は大きく三つに分けられる。有隣舎に学び、医業のかたわら漢詩修業に励んでいた一宮時代、医業を捨てて全くの詩人生活に入っていった名古屋時代、円熟期に入り中央に名を馳せた東京時代。彼の晩年は、頻繁に各地を漫遊したためたくさんの書が残されているが、一宮時代の書跡はそれほど知られてはいない。

後藤氏の収集は、量的には晩年作品が多いものの、一宮時代・名古屋時代と広きにわたり、書跡の他には春濤自身の詩稿・添削や、13歳で夭折した長男真堂(1847-1860)の自筆の漢詩「送別」など、春濤研究には欠くことの出来ない貴重な資料が多く含まれている。ここにあげた「聞鵬(ほととぎすを聞く)」は梁川星巖が激賞したといわれる作品で、天保10年(1839)21歳の時に詠んだ詩を、明治16年(1883)65歳の時に書いたものである。(毛受英彦)

聞鵬

(ほととぎすを聞く)

水晶花上月依微
 水意聴時聞得稀
 但是空山人寝後
 雲埋老樹一聲飛
 春濤六十五翁魯直

森春濤の書跡(縦書き)：水晶花上月依微、水意聴時聞得稀、但是空山人寝後、雲埋老樹一聲飛、聞鵬、ほととぎすを聞く。

一宮の木摺臼

一宮市大字大毛高須賀102 石井美勝氏寄贈

従来一宮市周辺で使われていた杵摺臼は、竹で編んだ籠状の筒を枠にして、土（赤粘土）をかため固定した土臼であった。この臼の歯は、カシ類などの板（へら）を土に埋め込んで作られる。一宮市萩原町にもこの土臼をつくる職人がいた。故野田伝左衛門氏（明治40年生まれ）は3代目の土臼職人で、その祖父が信州の人になって作り始めたと言う（長沢詠子氏の調査による）。土臼は『百姓伝記』の記述から江戸時代初期（寛永年間）に

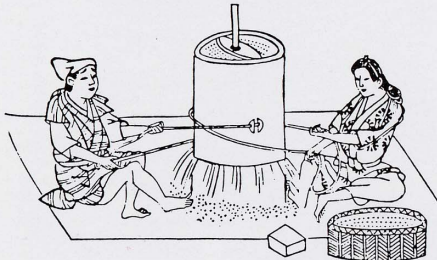


図1 木摺臼の使い方（『大和耕作絵抄』より）

伝来したとされているが、野田氏の調査記録は一宮周辺の土臼の普及を知る上で重要と言える。

それでは土臼が普及する以前、粃を摺るのに何を使っていたのか。一宮市大字大毛の石井美勝氏宅に木摺臼が保存されていた。

この木摺臼は直径約47cmの円筒形で、高さは約53cm（上臼の高さ42cm、下臼の高さ52cm）である。臼の歯は放射状に上臼に49、下臼に48本刻まれている。歯と歯の間隔は最大幅が2.5～3.0cmである。下臼にもうけられた心棒は、下臼の中心に



穴をあけ別の材を差し込んでつけられている。まわりには、心棒が動かないように綿のようなものが詰められている。また、上臼の胴部には臼を回す縄を通すための穴が3カ所にあけられている。これらの特徴からこの臼は、臼にかけた縄を2人で交互に引き、半回転を繰り返して粃を摺る半回転式の木摺臼と言える。さらに、後代に回転式の臼として利用するために、上臼上面に木製の把手が釘で打ちつけられている。材質は現在のところ不明である。

この臼は、残念なことにいつ頃からあるものなのか、誰が使ったもののかなどの伝承が全くなくなってしまっていた。しかし、石井氏のお話では祖父の代にはすでにあつたと言うことである。この臼がなんらかの形で搬入されたものなのか、当地で使用され伝承されたものなのか明確な答えはでないが、土臼以前に使われていた杵摺臼に1つの示唆を与えてくれよう。（田中禎子）

参考文献

- 佐々木長生 「調整・選別用具の発達過程（一）」
 （『民具マンスリー』第18巻3号、1985）。
 三輪茂雄 『臼』（法政大学出版局、1978）。

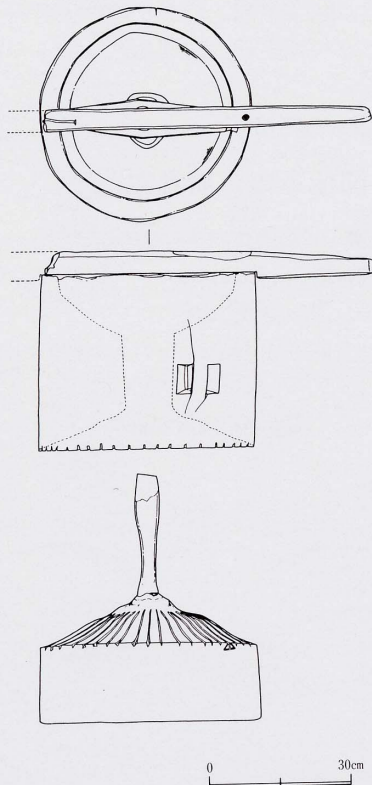


図2 木摺臼の実測図

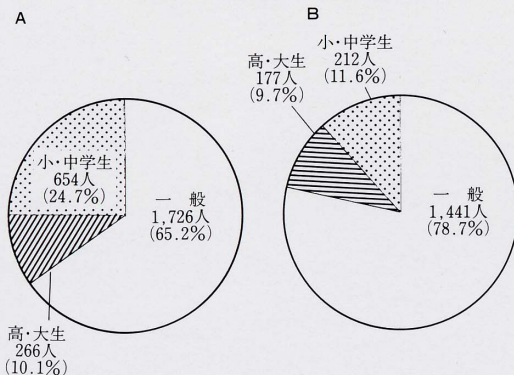
博物館日誌（抄）（1.6.1～1.10.31）

- 6.11 織維講座第3回 6.25 織維講座第4回
 7.9 織維講座第5回
 7.22 企画展「古墳のまつりーはにわー」
 ～8.31
 7.23 織維講座第6回
 7.30 講演会「埴輪の世界」
 講師 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
 学芸室長 猪熊兼勝氏
 8.6 映画会「日本の古墳」・「古墳から見た大和
 朝廷」・「古墳のつくられたころ」
 8.13 織維講座第7回
 8.20 講演会「南伊勢の古墳」
 講師 松阪市教育委員会
 下村登良男氏
 8.27 織維講座第8回・企画展展示説明会
 9.9 企画展「郷土の文人画」
 ～10.8
 9.10 織維講座第9回
 9.15 講演会「尾張の南画」
 講師 中京女子大学教授
 服部徳次郎氏
 9.24 織維講座第10回 10.8 織維講座第11回
 10.21 秋季特別展「一宮の名宝（Ⅲ）」
 ～11.23
 10.22 織維講座第12回

展覧会開催中の入館者数

- A. 企画展「古墳のまつりーはにわー」
 （7月22日～8月31日） 2,646人／35日
 B. 企画展「郷土の文人画」
 （9月9日～10月8日） 1,830人／25日

<入場者の階層別構成>



【民俗展示室の模様替え】 9/21～

今回は「一宮の酒造」をテーマに、市内丹陽町平島の太平雪酒造（昭和60年廃業）の真能清蔵氏よりご寄贈いただいた資料を展示した。太平雪酒造は安政五年より「味酥屋善助」として生産を始め、真能氏は分家した3代目にあたる。廃業する前は、11月になると新潟（後に岐阜）から杜氏がやってきて、酒蔵もにぎやかだった。

今では一宮で製造を続けている酒造店も数少なくなり、往時を物語る酒蔵も見られなくなってしまった。洋酒志向が強くなった昨今、日本の酒にも生き残って欲しいものである。



これからの博物館

- 企画展 「木曾川とくらし」 2/24～3/25
 木曾川はわたしたちの暮らしに水を与え、また生活の糧をも提供してきました。ここでは、筏や渡し船の資料をはじめ、川にまつわる生活の道具を展観します。

利 用 案 内

開館時間 午前 9:30～午後 5:00 （入館は午後 4:30まで）		休館日 ● 毎週月曜日 （ただし、休日にあたる場合は翌日を休館）	
常設観覧料		● 休日の翌日 （ただし、日曜日又は休日の場合は開館）	
区分	個人	20人以上の団体	● 年末・年始 （12月28日→1月4日）
一般	200円	160円	
高・大	100円	80円	
小・中	50円	40円	
（1人1回）			

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩 5 分

一宮市博物館だより 第7号

平成元年 12 月 13 日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺 2390 番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216